すると乃超がそれをひきとって、そんなのは珍しくない、二月に広西から武漢へ送られて来た壮丁をこの眼で見たけれど、全く同じことだった。あの寒い盛りにぼろぼろのシャツ一枚きりで、大部分はズボンもなかった。あの時はぼくらが民衆団体に呼び掛けて冬服を支給し、当局からも少しばかり援助があったけれど、あれじゃ焼石に水だ。機構全体が腐ってるんだからしようがないという。

話だけでも胸の痛むことだ。あんなふうにわれわれは、やれ動員だ、やれ抗戦だといって、しかも毎日毎日「最後の勝利は必ずわれらのもの」などとくりかえしていたが、抗戦八年の間に、いわゆる壮丁から弱丁へ、弱丁から病丁へ、病丁から死丁へというふうにして踏みにじられた同胞の数は、戦死したり日本の侵略者に虐殺されたりしたものの少なくとも百倍以上はあっただろう。私はそういいきることができる。

こういう壮丁のうちの少数がかりに最後まで残って部隊に編入されたとしても、戦闘力の足しになろうはずがないではないか。陳誠、劉峙、胡宗南、湯恩伯、顧祝同、羅卓英といった連中が、なぜ戦場に臨むやいなや退却のかけ競べということになるのか、なぜ彼らの部隊が鶏卵のようにぶつかったとたんに破れるのか、これですっかり納得がいくだろう。参謀総長兼軍政部長である何応欽の功績はたしかに第一等だ！　最高統帥も確かに「軍事の天才」だ！　そのうえ八年間の抗戦をやってのけたのだ。これはなんと奇跡ではないか。

いや、もしほんとにそんな奇跡があったとしたら、それこそとんだお笑い草だ。実は、何も不思議なことはないのだ。それは中国人民にはもう一つの鋼のような部隊があって、そ